記憶の劇場
活動⑦

ドキュメンテーション／アーカイヴ

活動趣旨

このプロジェクトでは、公衆の参加が重視される -- とくに物理的な作品の完成より、

仮設的な空間への参加のプロセスを重視する --- 現代のプロジェクト型やパフォーマンス型のアートの価値を共同体のそとに開くすべを、発見的にリサーチします。

それは同時に、消滅を前提とした " アート " に個人がかかわる可能性を、記録メディアと

それをつくる•つかうアクションのダイナミクスに注目してリサーチする試みでもあります。

発表内容

＜共通＞

「何が人を記録へと動かすのか」

＜各自＞

感想や今後の課題

メンバー発表③

☆亀田　恵子

“記録“は“人”の中から生まれ、
人の中へと還っていくことで
“記憶”になる。

→還元する仕組みとしての「写真日記」（仮説として）。

- 「何が人を記録へと動かすのか」

→「記録したい」と感じる体験が記録者の中に存在

→「記録したい」思う対象を「誰か（第三者）に伝えたい」という感動が原動力

→伝えられた記録が体験となるとき＝「記録が記憶となったとき」

•「記録」を「記憶」に還元する仕組み（仮説）

「写真日記」：維新派公演に集う観客の行動足跡を写真と撮影時の心情をコメントとして添えたもの

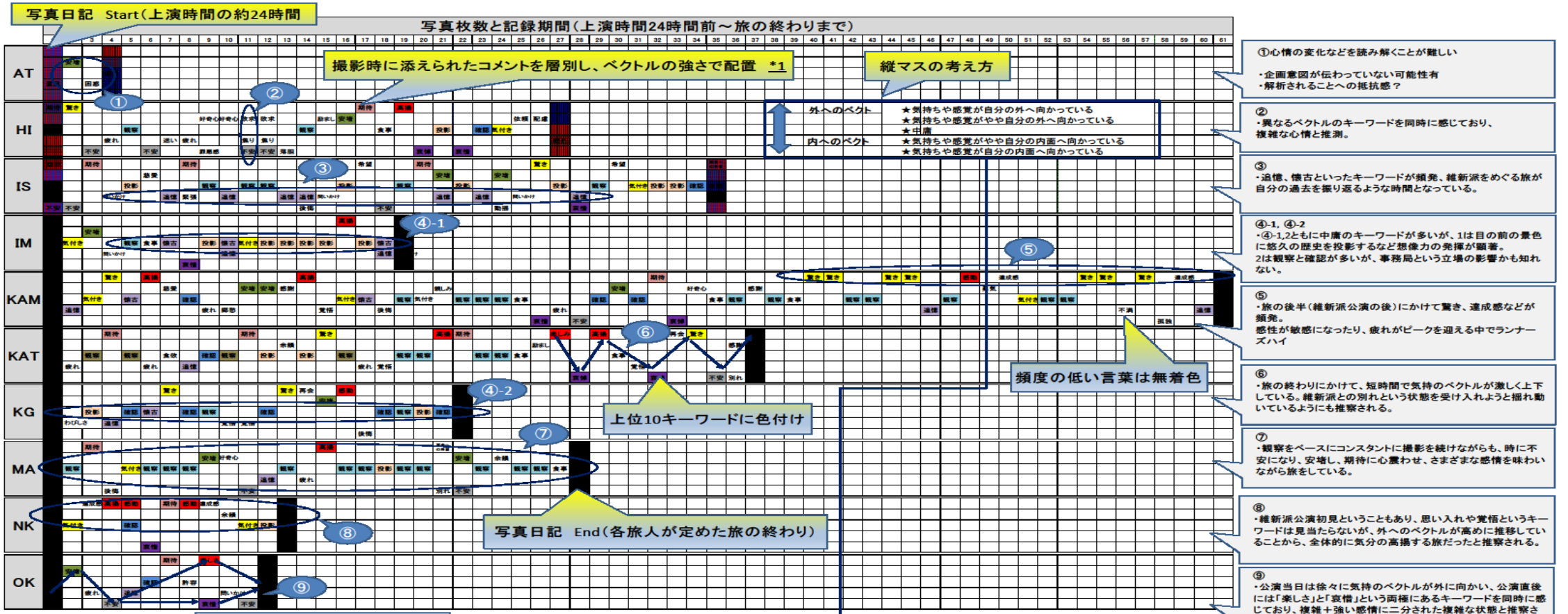
- **撮影タイミング**：撮影者の心が動いた瞬間と動線
- **撮影タイミングのシンクロ**：観客という存在のダイナミックな動線
- **感情チャート**：心情コメントを内向性と外向性の指標で層別。感情や感覚の動線、撮影者の状態

＊次ページにチャートあり

→「描かれていない記録対象＝余白」が、記録者と記録を見た人との共通のイマジネーションの広場となり、

共通の「記憶」へと還元されるのではないか？

■別表②：写真日記（撮影時コメント）についての詳細説明



①心情の変化などを読み解くことが難しい

・企画意図が伝わっていない可能性有
・解析されることへの抵抗感？

②
・異なるベクトルのキーワードを同時に感じており、複雑な心情と推測。

③
・追憶、懐古といったキーワードが頻発、維新派をめぐる旅が自分の過去を振り返るような時間となっている。

④-1, ④-2
・④-1,2ともに中庸のキーワードが多いが、1は目の前の景色に悠久の歴史を投影するなど想像力の発揮が顕著。
2は観察と確認が多いが、事務局という立場の影響かも知れない。

⑤
・旅の後半（維新派公演の後）にかけて驚き、達成感などが頻発。
感性が敏感になったり、疲れがピークを迎える中でランナーズハイ

⑥
・旅の終わりにかけて、短時間で気持のベクトルが激しく上下している。維新派との別れという状態を受け入れようと揺れ動いているようにも推察される。

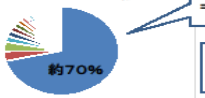
⑦
・観察をベースにコンスタントに撮影を続けながらも、時に不安になり、安堵し、期待に心震わせ、さまざまな感情を味わいながら旅をしている。

⑧
・維新派公演初見ということもあり、思い入れや覚悟というキーワードは見当たらないが、外へのベクトルが高めに推移していることから、全体的に気分の高揚する旅だったと推察される。

⑨
・公演当日は徐々に気持のベクトルが外に向かい、公演直後には「楽しさ」と「哀惜」という両極にあるキーワードを同時に感じており、複雑＋強い感情に二分された複雑な状態と推察される。

旅人は自分と世界を観察・確認しながら
さまざまな感情をダイナミックに体験している。

キーワードの内訳



上位10までのキーワードが全体の7割を占める
＝今回の維新派公演に関する特徴的なキーワード

頻度はそれほど高くはないが最終公演へと向かう「覚悟」
「再会への希望」は本公演を特色づけるキーワードだと考えられる

＊1：上位10位までのキーワードをベクトルの強さで配置したのが下記

1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
観察	驚き	気づき	追憶	懐古	投影	確認	期待	安堵	許容	高揚	感動	楽しい	不安	動揺	哀惜	哀悼

観察	驚き・気付き	追憶・懐古	投影	確認	期待	安堵・許容	高揚・感動・楽しさ・楽しみ	不安・動揺	哀惜・哀悼	疲れ	食事・食欲	問いかけ	覚悟	後悔	再会への希望・希望・再挙	好奇心	達成感	感謝	余韻	集り	悲愛	励まし	依求	別れ	再会	依頼	郷愁	緊張	孤独	混乱	困惑	畏怖感	懐しみ	配慮	不満	迷い	勇気	帰巣	わびしさ
44	26	22	21	19	16	16	14	14	12	10	10	6	6	5	5	4	4	3	3	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1